

子宮がん検診（施設）

動 向

平成20年度における子宮がん施設検診受診者は、頸がん17,093名（前年度比464名減）、体がん1,097名（前年度比458名減）で、受診者総数は前年より減少した。

受診者の大半は、健康保険組合の保健事業として総合健診や人間ドックと併用している方々で任意型検診である。

当協会の子宮がん検診は、婦人科専門医による問診と内診、コルポスコープ検査、細胞診検査である。

子宮頸がんの発生は若年齢化が進んでいる。その背景には「初交年齢の低下」が重要なファクターとしてある。40歳代以降の継続的受診はもちろん大切であるが、若い世代（20年度20歳代受診者数1,176名6.88%）の方々にも検診を受診していただきたい。

子宮がんは早期発見・早期治療が重要であり初期段階では自覚症状のない場合が多いため、定期的に健康診断を受診することが重要だと考えられます。

結 果

1) 子宮頸がん検診

2008年度の子宮頸がん検診受診者数は17,093名である。年齢階級別受診率は、50歳代が最も多く（26.2%）、次いで40歳代（25.3%）、30歳代（20.8%）の順であり、頸がん、異形成発見率の高い29歳以下の受診者数は、極めて低い（6.8%）、初診の割合は昨年度より低く（32.8%）、年齢階級別では、29歳以下が最も高く（74.1%）、次いで30歳代（45.7%）、40歳代（31.7%）の順で、加齢に伴って低下しています。子宮頸部細胞診の要精検率0.87%、要再検率1.06%、両者合わせた要再精検率は1.93%である。再精検受診数199名（受診率60.1%）から、頸がん12例（O期6例、I a期2例、I b期以上3例、腺がん1例）と異形成57例（軽度46例、中等度8例、高度3例）が検出されました。

頸がん発見率は0.07%、初診に高く（0.14%）、年齢階級別では、29歳以下が最も高く（0.17%）、次いで40歳代（0.09%）、30歳代（0.08%）の順で加齢と

ともに低下している。

頸がん9例中、早期がん（O期5例、I a期2例）が7例（78%）と高率に検出された事は、早期診断、早期治療に向けて、当該症例の方々に100%治癒をもたらし、多大な貢献をしたこととなり、当協会子宮がん検診の絶大なる効果である。当該症例の方はもちろんのこと、その父母兄弟姉妹親族そして友達の方の中に、灯火がともったことでしょう。

異形成発見率は0.33%、初診に高く（0.46%）、年齢階級別では、29歳以下が最も高く（0.60%）、次いで30歳代（0.36%）、40歳代（0.35%）の順で、加齢とともに低下している。以上の結果から頸がん、異形成の検出率は、29歳以下、30歳代の若年層に極めて高いのに、子宮がん検診の受診率は29歳以下6.8%、30歳代20.8%と極めて低い結果となりました。この現象が重要な課題です。

2) 子宮体がん検診

子宮体がん検診受診者数は1,097名で、頸がん受診者数の6.42%である。吸引チューブが挿入できず、経膈超音波による内膜厚さ測定に変更した症例（細胞採取不能例）12例を除いては増測式吸引法による内膜細胞診を実施した。内膜細胞診の結果、要再検例6例、要精検6例（疑陽性4例、陽性2例）が指示された。本年度は、体がん1例、内膜増殖症1例が検出されました。

3) 卵巣がん検診

一次検診で内診の結果、異常を指摘された方、または希望者に対し経膈超音波、腫瘍マーカーを併用した卵巣クリニックを開設しています。

本年度の受診者数は392名、卵巣がん0例、卵巣のう腫16例が検出されました。

関係の集計表は87頁に掲載